

島木健作

福田清人

矢野健二

● 人と作品

清水書院

島 木 健 作 ■ 人 と 作 品 33 定価はカバーに表示

昭和44年5月30日 第1刷発行 ㊟

昭和55年4月30日 第3刷発行



- ・編著者……………^{ふくだきよひと}福田清人/^{やのけんじ}矢野健二
- ・発行者……………野村久也
- ・印刷所……………豊栄印刷

検印省略

・発行所/清水書院/東京都新宿区東五軒町5

落丁本・乱丁文は
おとりかえます

Tel・東京(260)5261~6 / 振替・東京3-5283

郵便番号 162

CenturyBooks

清水書院



島木健作

●人と作品●

33

福田清人
矢野健二



CenturyBooks

清水書院

原文引用の際、漢字については、
できるだけ当用漢字を使用した。

序

青春の日、すぐれた文学作品や、歴史上に大きな業績を残した人物の伝記にふれることは、精神の豊かな形成に大いに役だつことである。ことにさまざまな苦難を克服して、美や真実を求め生きぬいた文学者の伝記は、この両方をふまえていて、強い感動をよぶものがある。それとともに、その作者の作品理解の大きな鍵ともなるのである。

たまたま五年前のこと、私は清水書院より、近代作家の伝記とその作品を平明に解説する「人と作品」叢書の企画についての相談を受けた。清水書院の要望は既成の研究者より、新人に期待するということであつたので、私の出講していた立教大学の大学院で近代文学を専攻した諸君を中心に推薦することにした。

一九六六年に出発したこの叢書も、幸い好評のうちに四年めに当たる今年一九六九年に完結することとなったが、その中の一巻がこの『島木健作』である。

執筆者矢野健二君は、立教大学の大学院修士課程卒業後、東京都内の高校に勤務している。修士論文も「島木健作」であつた。

幼少のころから逆境の中に生きて、ことに昭和初期の暗い時代を真剣に人生と社会に対決した島木の人間

像を描きつつ、その主要な作品を解説したこの本は、島本文学の手ごころなガイドブックとなろう。

福田清人

目次

第一編 島木健作の生涯

北海道時代——敗残者意識と文学——……………八

苦学の日々……………三

革命運動の渦中で……………四

作家への転身……………七

転向文学……………八

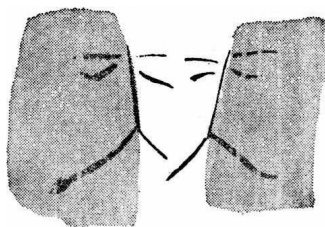
第二編 作品と解説

処女作 癩……………九



黎 明	一〇一
再 建	一一〇
生活の探求	一二七
礎―或る生涯―	一四六
黒 猫	一六二
赤 蛙	一六九
年 譜	一七七
参考文献	一八三
さくいん	一八四

第一編 島木健作の生涯



北海道時代

—— 敗残者意識と文学 ——

故郷をうたわない作家

人にはそれぞれ幼かった日々の思い出がある。たまらなく楽しかった日の思い出がある。せつなくよみがえりくるみじめで苦しかった日の思い出もある。そのような思い出をいっぱいこめて、いつも人の心に息づいているのは遠い故郷である。故郷で過ごした日々がたとえどのような苦汁くじゆに満ちた日々であったとしても、故郷はやすらぎであり、平和を恋う詩うたなのだ。

多くの作家たちが、幼かった故郷の日々をうたっている。山桃の赤い小さな実をつんだ山を、田んぼの畦あぜ道みちをあらう小川を、塀へいから落ちて泣いたガキ大将の級友を、なつかしくきれいに描いた。わたくしたちは、そのようなつかしい小説を、多くの作家たちから容易にみつけることができる。その描き方にそれぞれの違いはあるにしても、作家として、自分のおいたちの点検は、ほとんどの作家が一度は作品に定着させてみたいと思うものなのであろう。しかし、島木健作にはそれが無い。

島木健作は故郷をうたわない作家である。幼かった日々の姿を回想して、それを作品化しようとはしなかった。事実、なつかしく楽しいばかりの思い出は少なかったが、しかし、人なみすぐれて早熟であった少年

のころの島木健作には、貧しい境遇のなかで、暗い宿命観と、激しい自尊心とを同時にもって過ごした故郷での思い出は、だれにも増して多かつたに違いない。そのかみしめたいような幼い故郷の日々の自分を、作家として彼は一度も回想してみようとはしなかった。島木健作の特徴的なところである。

なぜか？ それは彼のおいたちに根ざすまじめでひたすらな性格と、彼が生きた時代の様相が考えられる。島木健作には、なつかしい気分にはなかつた。大正の後半から昭和の初頭にかけて、人生の目ざめとでもい関心もまたなつかしい故郷の詩にはなかつた。うべき青年期を迎えた多くの若者が、一様に、のびきならない立場で考えざるをえなかつた大きな命題、いかに生きるべきか、というひたすらな求道の過程が、ほかならぬ島木健作の、作家としての歩みのすべてであり、律気（りつき）で一途（いちず）な彼の性格がなおいっそう島木健作という作家の歩みをきわだたせるのである。

出生

明治三十六年（一九〇三）五月七日、朝倉菊雄（島木健作の本名）は、北海道札幌市北一条西十丁目に生まれた。八人兄弟の末っ子である。下の二人、菊雄とすぐ上の兄だけ母が違う。生家は別に変わったところもない普通の民家であったが、生垣（いけがき）で囲まれた庭に、一本の八重桜があり、この桜の木だけが、後年になってからも島木健作の印象に残っていた。生家はいつか人手に渡り、彼が作家になってから、なにかのおりに尋ねてみた時には、安っぽい下宿屋に変わっていたそうである。菊雄が小さかったころは、ちょうど家の前は御料局で、そこには広い庭があり、池やいろいろな種類の木立ちが茂っていた。自尊

心が強く偏屈で、友だちもほとんどなく、いつもひとりで過ごした菊雄は、御料局の木立ちや池の周囲で遊びたいと思い、塀の破れ目をさがしてみたり、なんとか乗り越えようと試みたりした。

父 母

父は朝倉浩ひろしという。まだ青年のころ、岩手県から仕事を求めて、北海道に渡ってきた人であった。初めは警察にだけ勤めて道内の各地を転々としていたが、菊雄が生まれたころには転職して北海道庁の鉄道書記をしていた。菊雄が生まれた翌年の明治三十七年は、ちょうど日露戦争が始まった年である。この戦争の最中、父は道庁の仕事で満州の大連ダイリエンに出張していたが、そこで病気にかかり、不運にもその地の野戦鉄道監理部の宿舎で死亡した。菊雄がまだ二歳のときである。だから、菊雄には父の思い出は全くない。

菊雄の母はマツという。朝倉浩にとっては後妻である。マツは北海道生まれで、最初は本家の伊藤家を継ぐために養子を迎えたが、事情があつて離婚し、そのあとに朝倉浩と結婚した。マツが再婚した時、朝倉浩にはすでに六人の子どもがいた。一度に六人の子どもの母にならねばならなかったことは、マツの不遇な身の上を暗示している。再婚後、マツは二人の子どもを生んだ。ひとりには八郎であり、ひとりが菊雄である。マツにとっては、血のつながりのない六人の子どもたちが、それぞれひとりだちできる年齢になっていたこともあるが、朝倉浩が大連で病死した後、菊雄と兄の八郎、つまり自分の実子をつれて朝倉家を出た。以後、マツにとっては長くてつらい生活が始まる。



明治36, 37年ころの健作
左から母マツ・健作・兄八郎

「小役人であつた父に早く死なれた私の家の窮乏はその頃になつて底に達したかに見えた。月末に大家の番頭が来て、玄関先で母との問答がはじまると、私は全身を石のようにかたくして、どこへ行つても声が聞えないというわけにはいかない家の隅で息をのんでいた。」

これは、菊雄が十五歳ごろの自分の家のようすを回想して書いたものであるが、母が女ひとりの手で、どのように苦勞をして菊雄を育てたか想像がつく。夜おそくまで針仕事をしたり、他人の衣類を洗たくしたり、事務所の留守番や走り使い、また近所の手伝いなどをして、ようやくその日を送っていたが、このようなことでいくらせつせと働いてみても、どうしても借家の家賃を払うことができない。そこでとうとう借りていた家を追い出され、行くところがなく、しいには菊雄をつれたまま住み込みで働くこともあった。

明治時代の、めぐまれない地方の女として育てられた母は、字を書くことができなかった。母に代わって、小さな菊雄が借金の証文を書かせられたりした。母の生きがいは、ただ子どもにだけあったと思われる。菊雄が青年になつてから、農民運動にすべてをささげ、母のことをかえりみる余裕を失つてい

た間も、また農民運動の最中に、警察の手で捕えられて刑務所につながれていた間も、母は、息子の行動の意義とそのなりゆきを、十分に理解することはできなかったが、文句一ついわずに、ただ黙々と菊雄の身上を案じ続けてきた。母のマツには、いつになっても安息の日はめぐってこなかった。

菊雄は、このような不遇な自分たちの身の上を、子どもときから次のように考えていた。

暗い宿命観、敗残者の意識

「私の母方の祖父は御一新（注 明治維新）後まもなく北海道へ渡つて（追われて行つたといふに近からう）開拓使長官黒田（注 黒田清隆）の下にあ

つて働いた。今年七十にちかい私の母親も北海道で生まれ、育ち、生き、老いたので、私は三代目の北海道人なわけである。渡道前の先祖達の郷土は、母方も父方も伊達の領土内であつたから、私は北方の人種に属する。この北方人の血と運命といつたようなものを、私は早くから子供心にぼんやり感じていた。子供の私を感じた北方人の血と運命といふものは、かつて勝利したことのない、朝にあつて栄えたことのない、いつも野にあつて踏んづけられ通して来たもののそれであつた。歴史や地理に関する書物を読んでみても、眼につくのは北方のみじめさだつた。戦つて敗れた敗残者どもが、あつたかい南の国から追はれ追はれて、半年雪に埋もれてゐる辺土に住みついた、それが自分達の先祖なのだと思ひ、遠い彼等のことを夢のような気持で考へた。自分の家の今の暮しをもそれと結びつけて考へるのだつた。自分の将来の運命のやうなものをも、そこからひき出して、ぼんやりと感じてゐた。自分の前途にいいことが待ち構へて

ゐるやうにはどうしても思へぬのであつた。」(『文学的自叙伝』)

このように菊雄は、子ども心に、自分の人生に暗い運命というものが、初めから離れがたく結びついていて、だんだん北へと逃げてきた敗残者の血が流れている。だから「いいことのあとにはすぐにもつとわるいことがやつて来て、根こそぎやつつけられる」。このように考えると、菊雄は無邪気に友だちと遊ぶ気にもならず、ひとりで過ごすことが多かった。そして人一倍強い自尊心と暗い運命観がいっしょになって、偏屈な気質の少年になっていった。

「優等生になつて賞をもらつても、素直すなおに有頂天うちようてんになつて見せるといふことがなかつた。大将になりたいとか、大臣になりたいとかいふやうな希望を抱いた記憶もない。子供の私の仏頂面ぶつちやうめんは小学校でも有名だつた。ただそれだけが原因で遊び仲間との間に争ひが起り、私は自分の不気嫌ふきげんの性質を人に説明することが出来ないのだつた。」

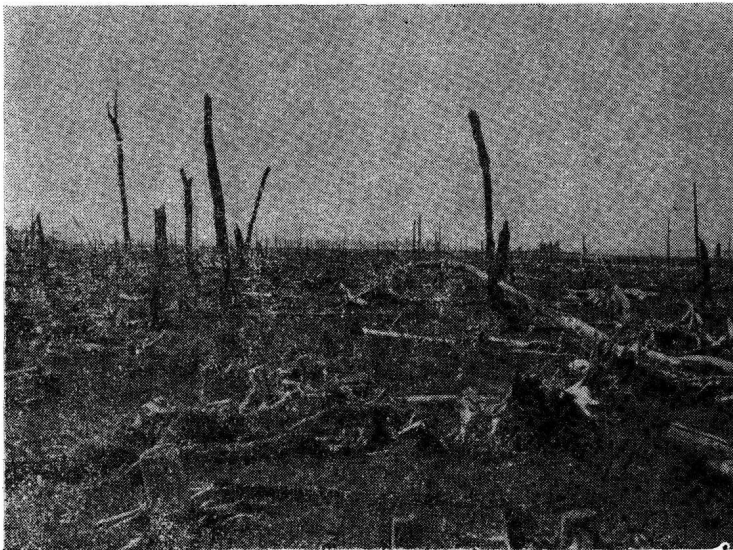
自分たちの貧しいことも、敗残者という運命のせいのように思えた。祖父たちは、北海道開拓のために、政府から広大な土地をもらつていた。それなのに、その土地もいつのまにか、後から北海道に渡ってきた要領のよい商人や、大きな資本家たちの手に渡っており、気づいてあわてふためいてみても、もうどうしようもなかつたのだ。若くして父に死別した母は、菊雄をつれて札幌の街まちを歩くとき、よくこんなことをいった。「なんとまアこのあたりも変つたこと！ このあたりはずーつと、昔はうちの祖父おじいさんの土地であつたん

だが。」

北海道的性格

当時の北海道は新開地であり、古い伝統のうちにつちかわれた情緒豊かな郷土のおいはなかった。荒々しい自然が手つかずのままに残っていた。だから島木健作には、もともと日本固有の伝統と因襲につつまれた、それゆえにこそある面ではいっそうなつかしい郷土はなかったともいえよう。しかし、その反面、新しく開かれていく土地には、たくましい精神が息づいている。荒野を切り開くエネルギーと、先駆者としての誇り、あるいは荒々しい大自然がたたえている豊かな生命力が、自然に人に反映する。このような環境から、菊雄も多くの感化を受けた。彼は次のように述べている。

「我々^{われわれ}は新しいものに対しては敏感であつた。我々を酔はすような古い伝統は周囲の生活のなかにはな



野付半島トドワラの枯木群

かつたし、新しさに向つて動くことを阻む古い諸關係からかなり自由であつた。そのやうな新しさと自由とは全体として北海道そのものの生命の特質であつたのだから」と。

また、大自然についてはこうも語っている。

「いかに激しく我々の上に作用する地方的な自然と風土とをわれわれの故郷はもつてゐることだろう。たとへば内村鑑三・志賀重昂などは、この北方の自然がかれ等の人間に及ぼした影響がいかに深かつたかについて語つてゐる。その影響は殆どかれ等の全生涯を決定したのであつた。北海道の自然の骨格は全く独特である。流水を浮べて死のやうに黙したオホーツク海に向つてひとり立つた時、根釧原野の一角に立つて遠く近く走る野火を望み見た時の印象を私は忘れることができない。それは荒涼として世にも寂しきものだが、また人の心を永遠なるものに向つて呼び覚さずにはゐない深さを持つてゐるのである。」

このように、新しいものに敏感で、自由の気風があふれていた街と、荒けずりで広大な自然とは、そこに住む人々の性格を形づくっていく。

「私達は何か特に北海道人といふやうなものを（中略）考えることができると思つてゐる。歴史は新しいが、北海道はその住民の上に激しく作用する風土を持ち、特徴のある生活の諸形式を持つことによつて、一つの地方的性格といふものをつくりあげてゐると思ふ。」と後年の菊雄は述べている。